

## 知ることからはじまる“きっかけ”

社会福祉学部社会福祉学科 2年 鈴木 秀明

活動先：NPO 法人 ゆいの会

クラス：松下 典子 先生

### 1) SLを通しての成長と気づき

6日間という期間でNPOの活動を継続的かつ自主的にできたという点で大きく成長した。なかでも個人による考えと他の人の考えをより身近に感じることができ、課題が見えてきたとき話し合いを経て考えてきた。学生同士、NPOの職員、先生など考え方の異なる中で1つのことをやり遂げるのは、時間を要し事前の準備が必要だった。そのことを深めるために、各時間ふりかえりを行い、考えをまとめあげていった。

活動では主に高齢者や障害者の方、活動先の職員と直接話をし、体験し、学ぶことができた。わたしは今までにボランティア活動で体験はしてきたが、継続して活動する体験はなかった。そのため、その時を過ごせば終了であり、後のことを考えなくてもよいものだった。SLでは活動1つを行うにしても「どのように・どんなふうに・なにを目的に」ということを考えながら6日間をおこなってきた。目的を明確にすることで見えてきた気づきを大きく3つにまとめてみる。

#### 1. 居場所づくりの必要性

話すことの大切さ。何気なく生活していると気づかないことが多い。家族、大学、バイト先など色々な場所に会話の相手がいる。しかし、退職した一人暮らしをしている高齢者は、年金暮らしの家で生活する。特に外出しない人は次第に話す機会が失われていく。孫や友達とも会えるがいつも話せるわけではない。そうなったとき、サロンや集いの場があることにより話をする居場所ができる。そこでは思う存分、会話、食事、遊びと日ごろたまっていた“はなしたいこと”を解放することができる。高齢化が進んでいる今、いつでも対話できる“第2の家”居場所をつくる必要がある。

#### 2. 利用者主体の考え方

介護という言葉には身体機能を支えるものから、心に安らぎを与えるものなどさまざまである。訪問介護では利用者と買い物の付き添い、料理の簡単な手伝い、話し相手などの活動がある。ここでは職員が利用者に対して気を使わせてはならない。そのため利用者がしたいことをできる範囲で行うことが必要である。また表に出さないだけで各利用者は行きたい場所、やりたいことがある。そこをどう引き出していくか。やりたいことがあっても、利用者がその気持ちを声にしなければ行くことはできない。気持ちを引き出しつつ、些細な変化にも気づかなければならない。

#### 3. NPOの経営

NPOになると、資金管理が厳しくなる。営利を目的とした活動ではなく、非営利の考えでなければならない。しかし、会計や組織運営に携わらせてもらい活動のために資金の

必要性が見えてきた。あくまで施設を維持していくため、活動していくための資金である。そのため利益を考えることも必要であり、サービスの料金を抑え利用者に使いやすいようにすることも必要であった。公益を目的としながら必要経費分の利益を考えることが大切であった。また新たなサービスを取り入れるチャレンジも忘れてはならない。

## 2) 活動を通して見えてきた地域活動と社会活動

NPO のサービスを受けることはそこから生活を豊かにし、自分の時間をつくれることにつながる。介護疲れからの虐待、自殺が多くなってきている今日、地域にある NPO を利用することで、心にゆとりができ冷静に生活問題を解決できるだろう。しかし、利用する人はほぼ女性であり、なかなか男性に受け入れられていないもしくは認知されていない状況にある。

今回活動先では女性の利用者が多く男性は少ない状態であった。そのためサービスを利用している人はともかく、利用していない独居老人（特に男性）の心配をたびたびしていた。なぜなら、NPO の周辺を歩き、店、コンビニ、道では、杖をついた高齢者の方たちが多く見られた。高齢化に伴い自らが動かなければ自然と人との関わりは減ってくる。そのため「会話」をしないで生活ができる日々となる。「会話」とは“話す”と“聞く”の両方があり成立するものである。話すことは「ストレスを解放する手段、人生を豊かにするもの」また聞くことは「相手を受け入れること、新たな刺激を受けられる機会」であると考えている。そのため話したいことがあっても、相手がいなければ「話す」ことに意味がなくなってしまう。独居老人の場合そのケースは 2 倍、3 倍とリスクが増える。利用した方がよい人を地域の中から引き出していかなくてはならない。

昔と今を比べるとは適切ではないが、昔よりも人との交流は減っている。その理由として、人と関わらなくても生きられる社会が生まれている。ひとりで生きていける社会の形成があげられる。知らないことでも人に聞くことを選ばず、携帯、パソコン、メディアなどから情報を得ることができる。しかし、若者と高齢者では「情報を得る」の考え方は多少異なっていると感じる。「情報を得る」ことに加え、人との交流のツールの 1 つになっている。情報を得ることだけがほしいのではなく、“人との会話”も必要としている。

NPO は、1 度利用すればそこから幅広いサービスを受けられることができ、かつその人の生活状況把握ができやすい。もし、何度もサービスを利用していたのに突然連絡もなしに利用しないことが起きた時、利用者になにか問題が起きている可能性がある。直接利用者と触れ合うことで、そこから地域を見守る存在の一部になっているともいえる。NPO は誰にでも使えるサービス、行政ができない部分まで行えるという痒いところに手が届くサービスである。

しかし、これからはただ行政と NPO を分けているだけでは問題是对応できない。協力するまではいなくても、支え合える関係をとる必要がある。例えば行政側から NPO について情報喚起をし、知ることにより利用できるエリアを拡大していく。市全体の幸せを考えることでは、行政も NPO も共通している。そのため支え合いの関係を築くことは可能である。

最後に人として生きやすく生活できるような環境を地域全体で取り組むことが必要である。具体的に述べると、地域で過ごしているとだいたい住んでいる人が分かってくる。そ

の中で高齢者がいる、障害者がいるといったひとまとめの総称で呼ぶ町づくりではなく、個人、個人に対して必要な支援をしていけるようにすることが必要である。知ることからはじまる “つながり” のきっかけが多くある。

今回 **SL** を経験し、**NPO** に対して深く考えることがあった。考え、準備していたのにも関わらず、計画していたことができなかった。しかし失敗を経験できたことは今後自分の成長につながると思う。また失敗を失敗で終わらせず、ふりかえりをして何が悪かったのか自覚できたことが良かった。

**NPO** として “気づいたら利用していた” という、利用者の生活の一部に溶け込んでいたら、一番の幸せなことだと今回の **SL** から感じたことである。